



Vol. 6 青木健二／フォトグラファー

## 写真の本質を問い直す、 表現への覚醒が Photoshop の魅力。

青木健二さんは、シンプルかつ説得力に溢れた作風で、国内のみならず海外でも高く評価されているスティルライフ（静物）専門のフォトグラファー。長く4×5inフィルム主体で撮影してきたスタイルを転換し、1年半ほど前にデジタルへと移行した。精緻な表現を生み出すスタジオワークで、Photoshop はどのように活用されているのだろうか。



青木健二／フォトグラファー

1968年、東京都生まれ。1990年に桑沢デザイン研究所卒業後、IIGURA STUDIO勤務を経て1993年にKENJI AOKIフォトグラフィーを設立。1997年には静物の写真制作に専念するため、スティルライフ専門を宣言。以来、数多くの企業のためにアーティスティックな商品広告写真を提供する。Michael Ash PartnersおよびArtDepartment Europe所属。



### スティルライフ専門になった経緯は?—

かつては人物や風景も撮る写真家でしたが、スペシャリストになりたいという思いから12年前に静物以外の撮影をやめました。もともと「きれいな夕陽の写真を撮りたい」などと思ったこともなく、目的を持った表現やデザインに惹かれて写真を始めたので静物が適していたのだと思います。動かない被写体にもちゃんとシャッターチャンスがあり、その瞬間を逃して少しでも照明を動かすと二度と後戻りはできない。そのような難しさにも、スティルライフを選んだ意味があるのかもしれない。

### 広告写真に必要なことは?—

僕の仕事は、製品を素敵に見せることで企業のブランディングをサポートすること。職人としての立場はキープしつつ、表現者として社会にどうアプローチできるかがテーマです。しかし訴えたいことが多すぎる製品を撮影すると、スペックを伝えるための写真になってしまいがち。僕が目指しているのはその正反対のことなので、被写体のアイデンティティを美的に評価できる地点まで研ぎすますことに集中します。デザインの素質

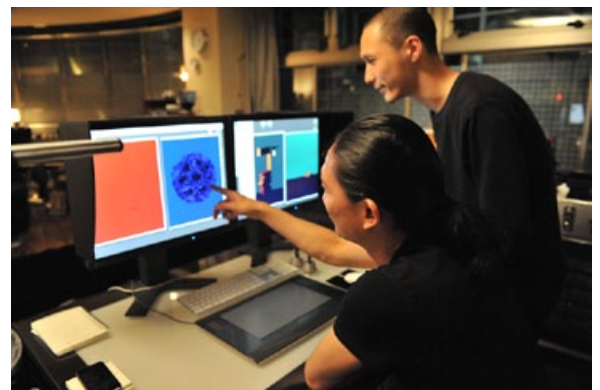
を引き出し、その製品が社会に対して言いたいことをシンプルに提示するよう心がけています。

### 写真表現でこだわっていることは?—

例えばステンレスなどの難しいテクスチャーでも、やればやるほど上手く再現できるようになるのがブツ撮りの世界。しかし一見完璧な製品写真は、全体のバランスに欠けて不恰好になっていることが少なくありません。ハイライトからシャドウまでの陰影には美的な急所があり、その部分にテクスチャーが出ていれば自然と良い写真になる。技術を見せようとするあまり、美しくない写真を撮る必要はありません。だから僕はテクニクよりも「そもそも何を目的として定めたのか」という出発点に立ち返ります。うまく撮れている写真と良い写真は違います。

### デジタル導入でワークフローに変化は?—

ポラがモニターに代わったものの、望まれるビジュアルを突き詰めて1枚の写真を提供するという目的に変わりはありません。依頼の内容を吟味して自分なりにアウトプットの方法を考え、それを具現化すべく最初のワンショットを切るまでが、クリエイティブにおける最も重要な時間です。フィルム時代のラボの役割も引き受けることで、かつての1人仕事が多くなった感じがありますが、あくまでフォトグラファー、レタッチャー、デジタルテックがそれぞれプロフェッショナルであるべきだと考えて業務を分担しているのが現在の環境。意図した表現を Photoshop の操作に的確に落とし込むためのコミュニケーションも重要ですね。



### Photoshop の進化がもたらしたものは?—

写真が自由に作れるようになったことは素晴らしい。ただし道具の性能が高すぎて、本質を見過ごす危険があるのも Photoshop の怖いところ。モニター上で50倍に拡大し

て作り込んだビジュアルを原寸で眺めて、「やっぱり最初に戻そう」ということはよくあります。Photoshopの最大の魅力は、このように「何が良くて、何が悪かったのか」という本質を再確認させてくれること。また、かつては「こう撮るしかない」という技術上の制約が生んだ傑作もたくさんありましたが、現在はすべてが可能であると仮定されているため、「できない」のではなく「やらない」と判断する必要が生じてきました。何気なく撮った最初のショットが、技術的に突き詰めたものよりも優れている場合があるのも写真の面白さ。そこを見極め、レタッチャーが作業をしすぎないように見張るのも仕事の一部になっています。

### 今後のPhotoshopに期待することは？

デジタル写真の制作において、プロのレタッチャーはかつての製版会社のような作業をしています。僕は彼らがどんなツールを使っているかなど気にせずに旧来通りの指示を出すので、直感的に画像を操作できるPhotoshopの進化はとても嬉しい。例えば、画像をぐるぐる回せる新機能（※「回転ビューツール」）はアシスタントにも好評ですね。Photoshopが写真のクオリティを向上させる余地はまだまだあると思っています。

### 海外で評価されるのに必要なことは？

東京では、言われた通りにどんな被写体でも撮れるオールラウンダーが重宝されます。しかし欧米では高度の専門性を持たなければ表現者として認められないので、僕もさらに自分



のスタンスを固めていく必要を感じています。また、日本では撮影前にラフを示されるのが普通ですが、ニューヨークではモノを渡されて「何ができるか提案して」と言われるだけ。常にクリエイティブな提案ができるようにするためには、日頃から「何を撮るか」ではなく「どんな表現ができるか」を意識することが重要です。例えば曲線の美しさを表現したいがために、輪ゴムやトイレットペーパーを被写体してみる。そこに写真の面白さがあり、プロダクトの魅力を発見するヒントも潜んでいるのです。

